

史學雜誌第拾貳編第九號

通編第四百十二號

明治三十四年九月十日

論 說

言語を以て直に人種の異同を判ずること

藤岡勝二

かよいな題をこゝに掲げましたわけは、田口博士が六月の史學雜誌に「國語上より觀察したる人種の初代」といふ題に依て一大論文を出されましたに就ていさゝか所見を述べたいと思ひ、且は博士の御一考を願ひたいと思ひましたからでありませう。博士の御意見に對する論文は言語學雜誌の第二卷第四號で新村出君が出されましたから、博士の御意見は我々が許すところであるかどうかは大抵明かであらうかと存じます。然し新村君の論以外にも御尋ねしたいと思ふことがありますから、これに添へて所見を述べます。

論 說

言語を以て直に人種の異同を判ずること

第拾貳編第九號

千八百九十一年にロンドンで出版になりました Max Müller の "Three lectures on the science of language" と云ふ書に "Thought is thicker than blood" といふことを論じたところがあります。田口博士はこの語を大に信仰して居られる様であります。それは妄信でなければ買ひかぶりであらうかと思ひます。そもくマクス、ミュラー先生は思想と言語と全く同一体のものだと考へた人の一人でありまして、この書の中にも言語と思想とは一つのもの、兩面に過ぎないと云つて居られます。ですから上の語を云ひ換へると「言語は血より重し」といふことになりません。然し言語と思想とを一つにすることの不都合であることはホイットニー先生も大に咎められまして、甚しく攻撃を加へられました程でありまして、今では何人も承知はしないのであります。

又言語は血より重しといふことも考へ様によつては甚危険なものになります。マクス、ミュラー先生が之を出された其初の意は言語の分類をすることについてで有つたので、それですぐ人種の關係を説くつもりではなかつたらしいのであります。其證據には千八百五十四年にフンゼン氏に與へられた書簡には "It is impossible to imagine that ethnological race and linguistic race should continue to run parallel" と云つて居

られます。とかく先生は言語をあまり重く見過ぎる爲に、時々危険な言ひ方をせられて誤謬に陥られたこともありましたが、こゝではまだ多少區別が明について居たらしいのであります。ところが田口博士はその危険なところを眞受けにして、そして先生の誤謬を受けつがれたのは、まことに惜しいと思ひます。かのチュニアンといふ語でもその通りで、今日言語學のものどもは、全く放棄して居るのに、博士はマクス、ミュラー先生の誤つて居た時の誤つた考を繼いで之を用ゐて居られる。先生の後年には如何に考が進んだか、今日の言語學界ではどんなに取扱つて居るかを、博士が御承知なかつたのは自ら明言して居られる通り、慥に言語學に關する御研究が淺かつたのであらうと思へません。之を要するに、言語は血より重しといふのは、言語の分類をするのに、人種的の分類によるよりは、言語其自身の性質構成如何に依て分類する方が至當である、といふ意に用ゐなければならぬのであります。たとへ先生は言ひ過ぎて誤つて居られるにしても、今日我々が此語を自分のものにして、用ゐよとするとするならば、かうとらなければなりません。

人種學の研究に依て、其學が人種を區別しようとする其範圍内に迄踐み込んで、言語を以て人種の異同關係を直に論斷しようとするのは、たしかに誤つて居ります。長

論 說

言語を以て直に人種の異同を判すること

第十二編一〇三三

々しくこれを申しますよりは、こゝにサーメの言葉を擧げませう。

Language is an aid to the historian, not to the ethnologist. So far as ethnology is concerned, identity or relationship of language can do no more than raise a presumption in favour of a common racial origin.

Where all else—physical characteristics, habits and customs, religious beliefs and practices—indicate that two populations belong to the same race, similarity of language will furnish additional and subsidiary evidence, but not otherwise. If ethnology demonstrates kinship of race, kinship of speech may be used to support the argument; but we cannot reverse the process, and argue from language to race. (Introduction to the science of language Vol. II. p. 317.)

これをしても不當であるといはるゝならばそれまでのことでありますが、このサーメの云ふところが誠ならば、博士の企が既に見當を誤つて居るといはれませう。言語の類似が出来る原因は、社會の觸接が最大しかなものであることは博士も明に承知して居られるに相違ありません。十五頁のとこみに云はれたことは即ちこゝを指されて居るので、全く間違のないところでありませう。それにも拘はらず、言

語の類似で人種の類似若くは同一なことを直に判断せらるゝのは甚不思議であります。

又言語を比較することに付ては、博士は「文法の同じ」といふことをのみ云つて居られる。單語の同じであるとは勘定に加つて居られないのであります。これは單語の同じであることは強ち人種が同じくなくても人民の觸接で出来ることゝ信じて居られるからであります。そこは大變理由が立つて居ます。しかしながら言語には音の變化もあれば意味の變化もあるから、一寸觀察した位では同じとちがふとも妄りに云ふことは出来ない、一見ちがつて居る様でも語傳が同じことがあるといふことは承知して居られるかどうか分かりかねます。若し承知して居られるならば精しく單語もしらべ且其歴史を見ることも勘定に入れられなければならんと思ひます。さて其文法の同じと云ふことは、どんなことかとしらべて見ると、名詞の格を示すもの、名詞の格を示すもの、即ち我國語のテニヲハの格が同じと云ふとにしております。名詞の格を示すもの、即ち我國語のテニヲハの様なものはサンスクリットにも、チベットにもラテンにもトルコにも、ハンガリーにもバスクにも、亦日本にもあつて其あり場所が同じ様であるから、日本語と此等の語と

論 說

言語を以て直に人種の異同を判すること

第十二編一〇三三

同系であるといはれ、其他の現今の歐洲語はさうでないから、彼等はサンスクリットと同語源、即ち同じくアリアン語中に入れるべきものでないと云つて居られます。これはそもそも不思議な断定でサンスクリットなどの語尾變化はどう見て居られるのか、我國語のテニヲハの國語上に於ける性質と價值と及其歴史とはどこ迄慥かめられたのであるか、此等を比較する時に言語の形式要素は全体如何なるものであるかを知つて居られたか、甚不明であります。博士の新説が顯はれて我々も研究して見たくもありませんが、どうも今迄に知りて居るだけの考では手もつけられない様に思ひます。博士が其新説を學會の大會の演説に意見として發表せられるだけの御親切がありますならば、次で日本語のテニヲハの性質價值とサンスクリット等の語尾の性質價值とが同じであるといふ證明をもなさる様に願ひたいものです。只ば、と同じだ、同じ位置にある、とばかりですぐに兩者を同一語系に入れようとせられるのではとても我々は満足が出来ません。

言語學の方で語を比較するのには、なかなかの手續をかけねばならぬのであります。只皮想の考では許さぬのであります。ガレンツが申して居ることがありますから左に挙げませう。

Dass der Wolf zum Hundesghelehe gehört, lehrt uns ein einziger Blick. Dass aber die Blindschleiche nicht eine Schlange, sondern eine Eidechsenart ist, erfahren wir erst, wenn wir dem Tiere die Haut abstreifen und es anatomisch untersuchen. Beiderlei kommt auch in der Sprachwelt vor, nur dass hier noch öfter die Verwandtschaftsmerkmale unter der Haut zu suchen sind. (G. v. d. Gabelentz: Die Sprachwissenschaft. S. 151.)

この通りで、とても皮想ではかり判断することは許して居りませんから、尙一層の御手数煩はしたいものです。

次には文章上に於ける語の配置であります。これを以て類似を見る大切なものと考へて居られるらしい。然しこれのみでは類似若ば同一の證明にはなりかねます。たとへ語の配置が同じ様でも其語彙がちがひ其變化がちがつて居るときには同一といふことは出来ません。尤も語彙や變化は素人目で視て違つて居ても音韻の法則等から調査していけば、もと同一であつたことが分りますから、まづ比較しようとする各國語について詳細に音韻のことを探究して、そして後に異同をたしかめねばなりません。さうした上で語の配置も思想の内的形式も同じであるならばそれ

論 說

言語を以て直に人種の異同を判すること

第十二編一〇二六

ばもうたしかに同一類としてもよろしいが、それもしないで只語の配置だけで見
るのは甚危険です。言語學者の中にも語の配置だけを貴んだ人がありましたが、今
ではそれで以て一切を證明することは出来ぬと凡てが信じて居ます。况んや直に
人種の論に及ぼす等は危険極まることです。只父や母位の例を加へて、ヨーロッパ諸
國はサンスクリットよりは支那に近いものと論ぜねばならぬといふに至ては、殆ど
御話しになりません。よくこれまで思ひ切られたと驚くのであります。

其他トルコ、ハンガリー等をラテン、サンスクリットと同族とし、今の歐洲語をサンス
クリット仲間から排斥せられる理由が一向腑に落ちません。これも尙一層證明を願
ひたい。即ち印度歐羅巴語の發達に就て分派に就て先人が入り代り立ち代りして
研究して、そして建立した歴史的比较であるその根據を破斥するに足る御説明
を願ひたいものです。我等は歐洲學者に妄從せんとも思はず、更に之にまさるとる
べき明論あらば千里を遠しとせずして伺ひに出ます。

言語を比較することに於て既に失當である上、言語を以て直に人種の異同を論斷
しようとせられた博士の勇志に感服すると同時に、尙教を請はんことを希望いた
します。其人種論に及ぼす如何はさしきいても、何故に我國語が他の示されて居る

國語と似て居るか、其等の音韻の本質に就て、其等の語根の成立に就て、其等の内的
關係に就て、其等の相互の歴史的事實の證明に就て、我々は尙一度御一考を煩はさ
ねばならぬと思ひます。それに就て一言付加へておきたいことは、我日本國語の性
質と其歴史に付てのことであります。これはどうきめて居られるのでありますか。
まづ手元の國語の研究から進んで而して後に他國の語と比較をして頂きたいと
思ひます。

論 說

度會延佳及び其神學

第十二編一〇二七